

## 箱庭体験のプロセスのなかでの言語化のはたらき

### ー 箱庭制作後のインタビューによる検討 ー

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
立花 咲葵

本研究では、箱庭制作後に見守り手と作り手との間で行われる言語的やりとりに焦点を当て、箱庭体験のプロセスのなかでの言語化のはたらきについて検討することを目的とした。

調査は 5 名の大学生を対象として、調査者が見守り手となりながら箱庭制作及び制作後の言語的やりとりを 3 回実施した。やりとりの際は、作り手に作品について自由に語ってもらうことを基本としながら、調査者側からの質問等も適宜行った。3 回の体験後に言語化体験に関するインタビューを行い、分析は KJ 法を参考にして行った。

調査の結果、作品について語るなかでは客観化が生じ、制作中に意識していなかった作品内の設定に気づいたり、作品と自分との繋がりを見出して自らへの気づきを得る場合があることが示された。さらに、作り手がイメージを言葉にする・見守り手がそれを理解する・見守り手が理解したものを伝え返すという一連の流れのなかではそれぞれに少しずつ差が生まれ、作り手が本来抱いていたイメージと言葉の間にずれが生じ得ることも示唆された。また、作品について語ることを通して自己表出をすることに抵抗を感じる場合もある一方で、作品を媒介とすることで自分について話しやすくなったと感じている協力者もいた。

系列的变化を検討するなかでは、回を重ねてイメージ体験が活発化することに伴い言葉が生じやすくなり、言語化が体験にもたらす影響もより意識されるようになるという流れが示された。